

〔書評〕

三原健一著

『日本語の統語構造』——生成文法理論とその応用

加藤 泰彦

本書は、生成文法の「統率・束縛理論」(後述)に基づく日本語統語論の概説書である。過去四十年の間に、生成文法が大きな理論的転換を迎える度に、海外では比較的最近のものだけでも、ラドフォード(一九八八)、ヘーゲマン(一九九一、一九九四)、ウーペルフウス(編)(一九九五)など多くの優れた概説書が出版されてきた。しかし国内で日本語で書かれ、しかも日本語の言語事実に即した概説書は、管見では井上(一九七六)、柴谷(一九七八)以降久しくなく、その出版が待ち望まれていたところである。本書はそのギャップを一挙に埋めるに足る内容をもつ。同理論に基づく主な研究成果が分かりやすく提示、解説され、同時に随所^{註1}にみられるその批判は小気味よく明解である。著者独自の分析の方向も示され、研究書としての性格も合わせもつ。

扱う束縛理論、移動の一般条件を規定する境界理論、各種の領域設定の基礎となる統率理論、音形を持たない代名詞の照応形とその先行詞との関係を扱うコントロール理論、である。いずれの下位理論も日本語からの具体例に基づいて基礎事項から説明され、関連する日本語固有の問題も論じられている。

本書は、二部十章からなる。第一部「統語論の基礎」では統率・束縛理論を構成する主な原理と基礎概念が、下位理論別に解説されている。取り上げられているのは、第二節の「 θ 理論の基本的発想法」をはさんで、句構造の一般特性を扱うX₀理論、述語の項構造と文構造との対応を扱う θ 理論、名詞句の分布を抽象的な格によって決定する格理論、代名詞・照応形・指示表現などの生起条件を

扱う束縛理論、移動の一般条件を規定する境界理論、各種の領域設定の基礎となる統率理論、音形を持たない代名詞の照応形とその先行詞との関係を扱うコントロール理論、である。いずれの下位理論も日本語からの具体例に基づいて基礎事項から説明され、関連する日本語固有の問題も論じられている。

各論となる第二部「構文研究」では、右の下位理論と交差しつつも、分析の対象となる現象別に問題が取り上げられている。「理論そのものよりも、むしろ理論を援用することによって明らかにされた言語事実、あるいは構文に重点を置く」(序文)という本書のもう一つの特色がここに見られる。扱われているのは順に「句構造」「格」「かき混ぜ操作文」「束縛関係」「主題文」「関係節」「主要部内在型関係節」「WH句」「数量詞遊離文」「受動文・使役文」である。

統率・束縛理論

人間言語の多様性と普遍性を同時に捉えるためには、個別言語の文法およびその一般的な特性を扱う普遍文法はどのようなものなればならないのであろうか。生成文法の初期のモデルでは、個別文法は各種の規則の体系からなり、規則の型式と複雑さに関する尺

度とが普遍文法を構成すると考えられていた。しかし規則の形式と適用に関する一般的な制約の研究が進むにつれて、普遍文法は一般原理と一定の選択肢をもつパラミター群からなることが明らかになり、個別文法（の少なくとも中核部）は各種のパラミターの値を固定することによって決定される（そしてこれはそのまま言語習得の過程である）ことが分かってきた。いわゆる「原理とパラミター理論」である。しかし、原理とパラミターという考え方は、いわば普遍文法の構成に関するメタ理論であり、それ自体で特定の経験的な仮説を構成するものではない。原理とパラミターの内容を、多くの実証的な分析を通して、具体的に明らかにすることが必要である。そしてその最初の試み——統率と束縛という基本概念に基づいて具体的な原理を提案した最初の試み——が本書でとりあげられている「統率・束縛理論」である。

周知のように統率・束縛理論はその後さらに大幅な修正を受け、現在では統率という概念そのものも破棄されている。しかしこのことは同理論に基づく分析がもはやなんの価値もないということを意味するものではない。その後の発展（いわゆるミニマリストのモデル）は未だ研究の方向付けの段階にあり、統率・束縛理論において試みられた膨大な分析に代わる具体的な提案はまだその断片が示されているにすぎない。統率・束縛理論において得られた実証的な研究成果は、ミニマリストに経験的な課題を与え、原理とパラミターの考え方をさらに押し進めるために不可欠である。本書の価値もまさにこの点にある。

一方、本書の序でも述べられているように「生成文法理論を指導原理にして発掘された言語事実の多くが、伝統的な国語学の方法論

のみでは、必ずしも明らかにされなかったものである」一点は注目されてよい。本書に収められた各構文に関する様々な事実観察は、たとえどのような理論的な立場をとるにせよ無視することのできないものである。周知のように、伝統的な国語学も明治期におけるその形成過程においては当時の西洋文法の影響を強く受けた。他言語との比較、異質な研究方法との接触は今後も日本語研究に実り豊かな成果をもたらすはずである。

以下では、本書第二部の中から著者独自の見解が述べられている部分を中心に、その内容の一端を紹介する。

Aboutness 関係

統率・束縛理論（さらには原理とパラミター理論一般）の基本的な主張の一つは、従来「構文」と呼ばれてきたものは付帯的な現象にすぎず、その諸特性は一般原理の体系から派生的に導き出されるというものである。当然そこで用いられる基礎的な概念や関係も各構文ごとに別々に設定されるものであってはならない。個別言語の諸構文の研究にとつて興味ある問題の一つは、個々の構文に特徴的だと思われる諸特性が果たして当該の理論に既にある諸原理によって適切に記述・説明できるかという問題である。本書で著者は、従来の統率・束縛理論では確立されていなかった aboutness という関係概念が日本語統語論の分析に必要であると論じている。同概念によって認可ないしは意味解釈をうけることが示唆されている要素は次のようなものである。

(1) 多重主語構文の最初のカ格

山田さんが、娘さんが結婚した

(2) 総記のガ格

太郎が天才だ

(3) 認識動詞構文におけるヲ格

太郎は花子の横顔をととても美しいと思った

(4) 目的語空所文における先行詞

太郎は花子が殴ったと言っています

(5) 主題のハ

魚は鯛がいい

(6) 関係節

田中さんが買った本

これらの要素と後統の構成素の間にはいずれも「:」について言えば」という意味関係 (abouness) が成立する。従来別々に扱われてきたこれらの諸構文を貫く一般性が指摘されているわけである。特に注目されるのは(1)―(2)のガ格、(3)のヲ格が abouness によって付与(ないしは認可)されるという主張である。つまり、ガ、ヲには通常の構造格としての用法と同関係概念を担う用法との二つがあり、これらは互いに異なったメカニズムによって格が与えられるということである。また構造的にはこれらの要素はいずれも付加詞であるとされる。その結果、ガ格について言えば、従来意味のないしは機能的な区別とされてきた総記のガと中立叙述のガとが構造的にも区別されることになる。勿論、abouness の概念規定^{注4}や統語構造との対応関係、さらには格付与のメカニズムなど今後明らかにされなければならぬ点が多いが、注目すべき一つの方向が示されたといふべきであろう。

主題文

従来多くの議論を呼んできた「主題のハ」をめぐる諸問題の中で、本書で中心的に取り上げられているのは(イ)文構造における主題の位置と(ロ)主題と対照との関係についてである。前者について注目されるのは、従来主題のハといわれてきたものには三つの下位類があり、それぞれ異なった統語的位置を占めるという主張である。三つの類とは次のようなものである。

(1) θ 主題 (後統文の述語と θ 役割で結び付く主題句)^{注5}

林君は、犬小屋を作った(動作主)

岩崎君は、進学のことで悩んでいます(経験者)

(2) θ' 主題 (後統文の述語と θ 関係を担っていない主題句)

魚は、鯛がいい

三和銀行は、坪井君が名古屋支店に勤めています

(3) 状況主題 (後統文命題が成立する状況を主題化して表したもの)

あれは、絶対にアメリカが悪い

これは、道を間違えたかな?

そして、これらの構造上の関係は、状況主題 $\vee \theta'$ 主題 $\vee \theta$ 主題、のようになるそれぞれ、E 節点に直接支配された位置、CP 指定部、IP 指定部である。(1)の主題句については、従来の分析に反して、それが通常の主語の位置を占めることが語順変更の可能性などに基づいて示されている。

一方、主題と対照との関係については、この区別が「談話現象であり、文法において区別する積極的な根拠はない」(二〇六頁)という立場をとる。その基本にあるのは寺村(一九九二)の見解——ハ

の機能は文中のある要素を対比させることにあり、対比する相手が文中に存在するとき対照のハとなり、特に意識されないとき単なる主題となるという認識——である。ただし、対比する相手の存否を決定する諸要因については明確にされるに至っていない。

疑似関係節その他

いわゆる関係節構文^{注6}も日本語生成文法において最も早くから注目され、様々な分析が提案されてきた。本書で著者は、従来の諸説を批判的に検討しつつ、新たな分析を提案している。その特徴は次の四点である。

- (1) 日本語関係節は主名詞の補部の位置をしめる。
- (2) 関係節の形成には移動が含まれず、節内の空範疇はゼロ代名詞である。
- (3) 関係節と主名詞は *wh*-ness 機能により接合される。
- (4) ゼロ代名詞は主題関係にもとづくコントロールによって解

積される。
それぞれの主な根拠となっているのは(1)については主節・従属節の時制に関する制約、(2)は主名詞と関係節内の空所との関係が移動の一般制約に従わないこと、(3)はキーン・コムリーの接近可能性階層に対する関係節と主題関係との平行性、(4)は関係節内の空所の解釈が格(およびそれに連動する主題役割)の階層性に従うこと、である。また、この分析はいわゆる主要部内在型関係節に対しても適用され(ただし、同関係節は副詞節であるとされる)、その過程で、下接の条件や格の制限に基づく最近の分析がいずれも不備であることが論じられている。(1)でも、久野(一九七三)やKuruda

(1974, 1977)らによる比較的初期の研究の洞察が受け継がれている。WH疑問文については空演算子の移動やLFでの先導分析を退け、原位置での無差別束縛のみによる分析を提案している。また、かき混ぜ操作文については弱交差やLFでの再構築化をめぐって、さらに格理論については与格主語や能格構文をめぐって興味深い論述が展開されている。

終わりに

序文でも指摘されているように、最近の日本語研究の一つの問題は、かつてはお互いの研究に少なからぬ関心を寄せていた日本語学と生成文法の研究者たちが、ここ二十年程の間にしだいに離れて行き、相互の交流が殆ど行われなくなっている点にある。これは日本語研究全体にとっても、また本来、事実観察と理論構築とが言語研究の両輪であることを考えても、不幸な状況であると言わざるを得ない。この状況を打開するためには、少なくとも双方の側から、研究成果を分かりやすい形で提示することが必要であろう。本書執筆の背景にはこのような問題意識がある。そして実際に、著者は交流を進めるための確実な一歩を示したと言えよう。本書の続編となるような本格的な概説書が今後も書かれることを期待したい。

最後に、本書は、著者が主な対象とした日本語研究者だけでなく、外国語学の諸分野で理論研究を行っている多くの若い学生・研究者にとっても必読の書であることを付け加えたい。日本語との対照から多くの理論的洞察が得られることがあるからである。ここに本書が果たし得るもう一つの交流の可能性がある。

注1 他に単行本ではないが井上和子(編)(一九八三)『講座現代の言語
1 日本語の基本構造』三省堂 所収の諸篇参照。海外で出版された
最近のものには、Shibatani (1990), Tsujimura (1996)がある。

注2 この理論は、チョムスキー「統率と束縛」についての講義(一九八二)
により輪郭が示された。「統率」とは文の構造表示である句構造上に定
義される基礎的な概念の一つであり、これにより非常に局所的な領域
が指定される。「束縛」は一般に演算子と変項との間に成立すべき関係
であり、照応形やWH句の解釈がこれに従う(三四頁、四一頁の定義
参照)。

注3 森岡健二(一九七九)『明治期文法論の成立——西洋文法との対比の問題』
『現代語研究シリーズ3・文法の記述』所収、明治書院)等参照。

注4 aboutness 関係については、それが「文法的知識のみならず世界に
関する知識をも内含する」(二三〇頁)ことが指摘されている。文法
と談話の要因とがどのように相互に干渉するかと言う問題がまず明
らかにされる必要がある。

注5 主題役割(θ役割)とは述語とそれが義務的に要求する項との間の
意味関係の一つであり、動作主、経験者、行為の対象、被行為者、な
どが含まれる。

注6 著者は、日本語のいわゆる関係節が英語などの関係節とは異なる点
を重視し、「伝統的に関係節と呼ばれてきた構造を疑似関係節と称す
る」(二三三頁)ことを提案している。

井上和子(一九七六)『変形文法と日本語(上)(下)』大修館書店。

久野 暲(一九九三)『日本文法研究』大修館書店。

柴谷方良(一九七八)『日本語の分析——生成文法の方法』大修館書店。

寺村秀夫(一九九一)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版。

Chomsky, N. 1981. Lectures on Government and Binding. Dordrecht:
Foris Publications. (原口他訳『統率・束縛理論』研究社)

———. 1995. The Minimalist Program. Cambridge, Mass.: The MIT
Press.

Haegeman, L. 1991, 1994 (2nd). Introduction to Government and
Binding Theory. Oxford: Basil Blackwell.

Keenan, E. and B. Comrie. 1972. Noun Phrase Accessibility and
Universal Grammar. Linguistic Inquiry 8: 1.

Kuroda, S.-Y. 1974-1977. Pivot-Independent Relativization in
Japanese I-III. Papers in Japanese Linguistics 3-5.

Radford, A. 1988. Transformational Grammar: A First Course. Cam-
bridge: Cambridge University Press.

Shibatani, M. 1990. The Languages of Japan. Cambridge: Cambridge
University Press.

Tsujimura, N. 1996. An Introduction to Japanese Linguistics. Cam-
bridge, Mass.: Blackwell.

Webelhuth, G. (ed.) 1995. Government and Binding Theory and the
Minimalist Program. Cambridge, Mass.: Blackwell.

(一九九四年十二月二十日発行 松柏社刊 A5判 三三四頁
三三九九頁)

———上智大学外国語学部助教授——
(平成八年六月二十五日 受理)